

福島を肌で感じるツアーに参加して

栃木県難病団体連絡協議会 玉木朝子

去る12月9・10日「3.11 東日本大震災 第6回福島を肌で感じるツアー」に参加させていただきました。何度か参加したいと思いながら日程の都合がつかずやっと一緒できたというのが本音である。

6年前の震災時、私は衆議院の厚生労働委員会に所属していた。何度か委員会として、又個人として現地に行かせていただいている。しかしその当時は仮設住宅の建設状況や障害者の就労等、目の前にある問題に対処することで精いっぱいであったと思う。案内されたハローワークで被災者の方に罵声を浴びせられたこともあった。地震は天災、誰が悪いわけでもない、復興に力を注ぐべきとの思いで動いていた。しかし今回川俣町から飯館村、南相馬と案内していただき、自分がこの震災の点の部分しか見ていなかったことを痛感させられた。

昨春避難解除となった地域、現在も帰還困難となっている地域の国道を通った。至る所に線量計が設置され、通行止めの看板ばかりが目につく。特に住むことのできなくなっている住居は震災で傷んでいるわけでもなく、津波が襲ってきたわけでもない。放射能という目に見えない危険にさらされ避難を余儀なくされているのである。これを人災と呼ばないでなんと呼ぶべきだろうか。

被災された多くの方々が現在生活を立て直すための努力を続けておられる。復興作業に関わっている方の話も聞かせていただいた。避難解除となった農地に戻られた佐藤さんは自宅をリフォームし、戻ることのできない方々の土地も耕したいと語られていた。今回は前向きに話される方々に接し、嬉しく感じると共に、自分たちのこれからの役割を考えさせられたツアーでもあった。

私たち個人が具体的に何かができる訳ではないかもしれない。しかし常にこうした状況に対し関心を示すこと。それが被災されたかたがたに対する協力ではないだろうか。私たちは決してこの悲劇をつくった原因を忘れていない、許していないと訴えることが被災地に対する応援メッセージではないだろうかと思っただけである。

最後に、この度のツアーにあたりご協力くださった皆様に改めて御礼を申し上げたい。寒い中病気を押してご案内くださった宮城の小関さん、福島の渡辺さん体調は悪化なさらなかったでしょうか。伊藤リーダーお体に気をつけて毎年この企画続けてください。ありがとうございました。